国立国語研究所学術情報リポジトリ

政策ニュース映画における否定的な表現の考察：戦後の社会課題と行政施策の可視化の試み

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2020-02-06
	キーワード (Ja):
	キーワード (En): Kawasaki Municipal News Movie
	作成者: 春木, 良且, 田中, 弥生
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002574

政策ニュース映画における否定的な表現の考察
–戦後の社会課題と行政施策の可視化の試み–

春木 良且(フェリス女学院大学 国際交流学部)†
田中 弥生(国立国語研究所 音声言語研究領域・神奈川大学 外国語学部)

A Study of Negative Expressions in Municipal News Reels
An Attempt to Visualize Postwar Social Issues and Administrative Measures

Yoshikatsu Haruki (Ferris University) †
Yayoi Tanaka (Kanagawa University)

要旨

本研究では、戦後各自治体が制作した行政映画（政策ニュース映画）である川崎市政ニュースを題材に、ナレーションに着目し、政策ニュース映画のコンテンツ分析を試みる。政策ニュース映画は、一般のニュース映画とは異なり、行政による施策が関係する内容が扱われる。

本研究では、特にナレーションの否定表現に着目して、そのコンテンツ構造を分析する。それによって、ニュース映画で取り上げられている問題提起を把握することができるため、当時の行政側が認識している社会課題とそれに対する政策の構造が可視化できると仮説付けた。特に、昭和 2, 30 年代のニュース映画を対象にすることで、高度成長期直前から、現在社会の原型が出来上がるに至るプロセスにおける、社会課題を捉えることを試みた。

０．はじめに

本研究では、戦後各自治体が制作した行政映画（政策ニュース映画）である川崎市政ニュースを題材に、ナレーションに着目し、政策ニュース映画の機能、役割などを明らかにする。政策ニュース映画は、一般のニュース映画とは異なり、行政による施策が関係する内容が扱われるため、コンテンツとしては、行政の施策結果の報告を中心とした実績志向のものと、今後の政策を示す政策志向のものに大きく大別できる。

報告者らは[春木 2018]で、特に政策志向のコンテンツ構造の分析において、ナレーションにおける子供の表現に着目した。現在では、余り聞くことのなくなった、「よい子」という表現が使われているニュース映画と、単に「子ども」という表現がなされているものの内容を分析、比較した。

その結果、「よい・良い」という形容詞が付加して表現される子ども達の集団に対して、それが付かない集団は、何らかの政策支援が必要な課題を抱えた子どもたちの集団であって、政策ニュース映画は、その背後にある社会課題を視覚化しているということを明らかにした。

結論としてそれらは、教育政策ではなく、福祉政策の対象となるべき子どもたちをペルソナとして記述したもので、政策ニュース映画は、今後の政策課題を可視化する機能があるものという結論を導き出した。

本研究では、こうした政策ニュース映画の持つ、その時点での政策課題を可視化するという側面に着目する。[春木 2018]では、「よい・良い」という「望ましい状態」の表現に着目したが、本研究では、より直接に、ナレーションにおける否定表現に着目する。否定表現が使われている場合、その否定の対象が、「望ましくないもの、状態」であることを意味する。そのため、問題提起と政策的な対応という構造を、そこから抽出することが可能であると考えている。

それによって、ニュース映画で取り上げられている問題提起を把握することができるため、当時の行政側が認識している社会課題とそれに対する政策の構造が可視化できるのでは、と仮説付け

† haruki@ferris.ac.jp

た。特に、昭和 2, 30 年代のニュース映画を対象にすることで、高度成長期直前から、現在社会の原型が出来上がるに至るプロセスの社会の姿を捉えることを試みた。

１．マスメディアとしての政策ニュース映画

1．1．政策ニュース映画とは

マスメディアと言えば、広告の文脈で用いられる通称「四マス」を意味することが多い。言うまでもなく新聞、雑誌、ラジオ、テレビである。その中でも、情報量の多さと、大衆に対する影響力で言えば、テレビという媒体は圧倒的であるのは否定できないだろう。

昭和 28（1953）年 2 月に、NHK がテレビ本放送を開始し、8 月には日本テレビ（ NTV ）が民放として、最初に本放送を開始する。その後、昭和 32（1957）年の地方放送局への大量免許交付と、高度成長期に商品として大衆に広まって行った「三種の神器」の一つとして含まれていたことによって、テレビは主要なマスメディアの地位を獲得する。その登場までは、テレビの地位は、明らかに映画が占めていた。動画と音声という圧倒的な情報量は、他の媒体が待たないものであり、戦前から昭和 2, 30 年代まで、国内における圧倒的な映画館の多さがそれを示している。

一般社団法人日本映画製作者連盟の「日本映画産業統計」によれば、スクリーン数（注：シネコンなどの登場以前はスクリーン数と映画館数は同じと考えていいだろう）は、昭和 30（1955）年に 5,184、最盛期は昭和 35（1960）年の 7,457 であり、最も少なかったのは、1993 年の 1,734 である。また年間入場者数で言えば、昭和 30（1955）年が最も多く、868,912 人だったのに対し、最も少なかったのは、1996 年の 119,575 人である。

このように、テレビの登場以前は、映画が主要なマスメディアであったため、娯楽の他に報道の役割も映画が担っており、ニュース映画が本編の他に映画媒体によってニュースが製作され、映画館などで本編の上映前などに流されていた。戦後になって、娯楽媒体として映画が再び脚光を浴びるのに併せて、戦後の復興や社会の変化などを記録したものとして、新聞社など様々な制作主体が盛んにニュース映画を制作していった。

本研究では、主に地域の記録として、各自治体によって地域の広報としてつくられたものを、「政策ニュース映画（municipal newsreel）」と総称する。ニュース映画を新聞の全国版とするならば、政策ニュース映画は、地方版といった存在である。

当初は復興の記録という側面が強かったようであり、報告者の調査では、大空襲の被害地域と政策ニュース映画の制作地域が、かなりの部分で重なっているのに注目される。政策ニュース映画は、主に昭和 27（1952）年のサンフランシスコ講和条約の発効前後から、日本全国で製作され始めており、昭和 30 年代後半から 40 年代に掛けて、東京オリンピック前後あたりが全盛期だったと言えるだろう。テレビの普及によって、映画が完全に娯楽のものとなって、報道の役割を失ってから、ニュース映画自体は衰退して行った。政策ニュースも、それに合わせるように、自治体のテレビ番組やWebニュース等に移行して行った。尚、現在見ることが出来る、戦後最初期のものは、昭和 23（1948）年度の茨城県政ニュースであり、最後のものは、平成 19（2007）年の神奈川県のものである。

製作主体は、広域普通地方公共団体（都道府県）単位のものが多く、基礎的地方公共団体（主に市区）レベルでは、県単位で作成されたものの一環として、管理されているものと、市レベルで独自に製作されたものがある。これらの政策ニュース映画は、多く複写されて配布され、映画館や公民館などで上映された。しかし公文書ではなく行政刊行物の一種として扱われており、管理規定が明確でない等の理由から、散逸してしまったものが多々ある。また現存するものも、媒体フィルムの劣化やデジタル処理がなされていないなど、史料管理として問題を抱えているものも多い。

報告者らは、神奈川ニュース映画協会が作成し公開した神奈川県政ニュース映画のうち、川崎市の委託によるものについて、昭和 27 年から平成 19 年までの全 719 本を分析する機会を得た[1][春木 2017]。神奈川県では、社団法人神奈川ニュース映画協会という団体によって、昭和 26（1951）年頃から、横浜、川崎、厚木などの県内諸地域の復興が記録されて行った。同団体は、昭和 25（1950）年に設立され、神奈川県や、横浜市、川崎市など、県内の公共団体の施策と事業を

[1] 本数は、計 719 件（ニュース No.29～1347）、1 件あたり約 100 秒（30 秒～119 秒）。合計再生時間：19 時間 30 分 34 秒。

PR するニュース映画や記録映画、教育映画などを数多く製作してきたが、平成 19(2007)年に役割を終え解散している。

神奈川ニュース映画協会の解散にともない、多くのニュース映画が、横浜市、川崎市に移管された。川崎市の委託による分は、川崎市民ミュージアムがデジタル化等を行い、権利処理等も終えて、現在は川崎市市民文化局が管理を行っている。また各映像は、「川崎市映像アーカイブ」として YouTube 等で公開されており、市政関係イベントの素材としても利用されている。

1．2. 行政との関係性に基づいた政策ニュース映画の分類

マスコミ研究の分野では、マスメディアの機能として、アジェンダ設定機能仮説が指摘される。あるテーマの重要性が報道での言及量・頻度により決定づけられること、すなわち一般大衆が注目する議題設定する影響力がマスメディアにあるという考え方である。

これに関しては、その効果や範囲などに関して、様々な議論がある。政策ニュース映画に関して言えば、こと昭和 2, 30 年代では、マス媒体が新聞、ラジオしか存在しない時代のものであり、また行政情報に関しては、唯一の媒体と言っても過言ではないため、特に地域社会に対しては、この議題設定の機能が強く意識されていたと推測される。

当時の一般大衆の情報行動や、ニュース映画の接触に関しては、推定でしかないが、例えば以下の図は、昭和 28 年の時点での、神奈川県下のニュース映画の上映館のリストである。 フィルムは 17 本プリントされ、それらが 5 週間に渡ってフルにこれら映画館で上映されたということがわかる。恐らくこの時代、映画は重要なマスメディアであり、ニュース映画の影響力が強かったことが伺われる。こうした点から、ニュース映画自体、政策の報告というよりは、特に予算の側面から、地域市民の理解を得るために、様々な問題提起を行っていたものと考えられる。

神奈川ニュース上映網一覧

週 / プリントNo.	第 1 週	第 2 週	第 3 週	第 4 週	第 5 週
1 号	(横浜) 日活	(平塚) 松竹	(秦野) 初音館	(厚木) 厚木東宝	(中野) 中野劇場
2 号	(〃) 松竹	(小田原) オリヲン座	(〃) 秦野新生	(〃) 厚木映画	
3 号	(〃) 横宝～グランド	(〃) 東宝	(茅ヶ崎) 大黒館	(湯ヶ原) 湯ヶ原キネマ	(真鶴) 真鶴劇場
4 号	(〃) オデヲン座～レアルト	(〃) 富貴座	(辻堂) 湘南映画	(松田) 金時座	(山北) 山北劇場
5 号	(〃) 国際～文化	(平塚) 旭～東映	(藤沢) 中央映画	(横浜) 金沢ジネマ	
6 号	(〃) マツクアーサー～光音座	(〃) 東宝	(〃) オデヲン～藤沢劇場	(逗子) 逗子映画	(三崎) 新生座
7 号	(〃) 横浜東映～横浜銀座	(横浜) 藤棚中央～浜富士館	(横浜) 子安曙～大口映画	(横浜) 綱島クラブ	
8 号	(〃) 名画座	(〃) 白鳥座～六角橋会館	(〃) 京浜劇場	(川崎) 住吉劇場	
9 号	(〃) 野毛劇場～横浜ニュース	(〃) 保土ヶ谷文化	(〃) 生麦会館	(横浜) アテネ劇場	(横浜) 戸塚
10 号	(〃) かもめ座	(平塚) セントラル	(茅ヶ崎) 茅ヶ崎新生	(国府津) 国府津劇場	
11 号	(横須賀) 東宝～追浜東宝	(横須賀) 久里浜日活	(鎌倉) 松竹	(横須賀) 市民会館	(横須賀) 長井遊楽館
12 号	(〃) セントラル～大映	(横浜) 春風座～スバル座	(〃) 市民座～テアトル	(〃) 衣笠白鳥座	(三崎) 三崎映画
13 号	(〃) ピカデリー	(〃) 永楽館	(横浜) 旭～千代田	(横浜) 東洋劇場	(横浜) 本牧劇場
14 号	(〃) 松竹～田浦劇場	(〃) 反町劇場～ロマソ座	(〃) 鶴見映画	(〃) 映画座	(〃) 新光映画
15 号	(川崎) 文化～オデヲン	(川崎) 国際～港座	(〃) 鶴見レアルト～鶴見ロマンス	(〃) キリヲン座	
16 号	(〃) 大映～東宝	(〃) 中央劇場	(川崎) 小田映画	(川崎) 高津映画	
17 号	(〃) 川映～銀星	(〃) 御幸会館	(〃) 大師会館	(〃) 中原劇場	

図1 神奈川ニュース上映館リスト(神奈川ニュース制作内容, 神奈川ニュース映画協会, 1953)

政策ニュース映画は、一般のニュース映画とは異なり、行政による施策を主な内容としている。コンテンツとしては、行政の施策結果の報告を中心とした実績志向のものと、今後の政策を示す政策志向のものが含まれている。この他に、地域の伝統行事や自然環境などを取り上げたものもあるが、こちらは行政との関連性は希薄である。

行政活動の結果報告に関するものは、川崎市政策ニュース映画を例とすれば、取り上げられている内容としては、①行政行為、②施設、設備、③市民活動、④事件、事故、⑤社会課題などが含まれている。

これらの中で、明示的に社会課題をテーマとしたものが考察の対象になるが、その他のテーマに関しても、行政の施策の前提として、社会課題の認識があるはずである。例えば施設設備の拡充や整備なども、行政活動として行われているとするならば、その背後には、その設備を必要とする社会的な理由があるはずであり、本研究では、それらをも含めて考察していく。

２．ニュース映画による議題設定

図2は、何らかの対策を必要とする「状態 A」に対して、行政が活動を行い、目標とする「状態 B」に接近していくという、社会課題と行政施策の関係性を示す。

図2　社会課題と行政施策

この構造において、状態 A を認識するとともに、それが「望ましくない状態」であることを判断し、目指すべき状態 B を定め、その具体的な施策を決定し実施するという一連の活動が、行政側にとって必要とされていると言えるだろう。

図3　川崎市政時報

政策広報などでは、これらの表明は比較的明瞭である。図3は、昭和 27 年 10 月付の、川崎市の広報誌「川崎市政時報」である。大見出し「川崎を狂犬の街から救うためには」でわかるように、広報内容は明確である。

ほぼ同内容で政策ニュース映画も作られることが多かったようであるが、政策ニュース映画は映像を含んでいるため、必ずしもこの構造が明示的に示されているわけではない

さらに、具体的な施策の実施の結果として、政策目標に接近した場合に、実績報告としてニュース化されるものが多いようである。

本研究では、ニュース映画のナレーション中の否定表現に着目するが、否定表現が使われている場合、その否定の対象が、「望ましくないもの、状態」であることを意味する。図4に示すように、ニュース映画中でその否定表現を元に「状態 A」、すなわち課題として認識されているものを明らかにし、さらにそこから、行政による一連の施策と政策目標を明らかにすることができると考えた。このように、本研究では否定表現に着目し、その時点での行政側の社会認識を明らかにし、さらに、対象のどこがどのように課題として認識されているのかを抽出していくことを試みる。

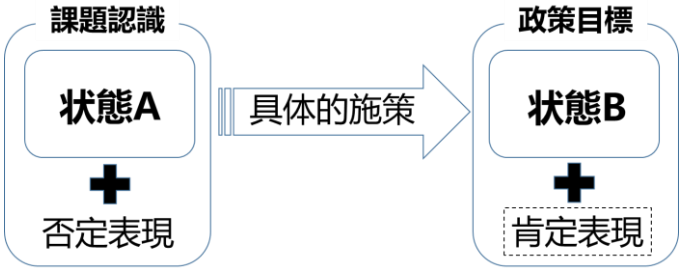


図4　否定表現による問題提起と政策目標

政策目標としての「状態 B」は、肯定表現によって表されるものであり、[春木 2018]では、肯定の表現である「良い子」に着目して、政策目標から、子供に対する行政認識を明らかにした。本研究では、その逆に、否定表現から行政認識を明らかにしていく。

2．1．ニュース映画における否定表現

本研究で取り上げる否定表現は、特に政策ニュース映画という媒体の性質を考えた場合、大きく3つの内容のものを含むと考えている。明示的な否定表現と、評価表現としての否定、さらに逆接の接続詞によるものである。前2者は、文法上の否定表現であるが、逆接の接続詞は必ずしも否定表現とは言えないものもある。以下にそれらを詳細に述べる。

2．2．1．明示的な否定表現

否定表現とは、叙述の内容を打ち消す表現であり、構文的否定と語彙的否定が含まれている。例えば、昭和 31(1956)年 5 月 16 日付け「皆さんのあと始末」では、以下のようなナレーションが述べられている。

*「皆さんが毎日捨てるゴミや体内から排出する汚物は、大変な量に達します。まず人口が増加する一方では、今までの手押し車のような**非科学的なもの①**ではそれを処理することが**できなく②**なってきました。*

…こうして短時間に汲み上げてしまうため、毎月五万石も出る汚物もたちどころに処理されてしまい、町を汚したこんな風景もなることでしょう。」

下線①「非科学的なもの」は、非という接頭語が付くことによる打消し表現であり、語彙的否定である。また下線②は、構文的否定である。

以下に、下線②に関して、望ましくない「状態 A」を示す「対象」と、「否定表現」、さらに「施策」と「政策目標」によって、このニュース映画における問題提起と政策目標を整理して示す(図5)。

対象：「皆さんが毎日捨てるゴミや体内から排出する汚物」
否定：「処理することができなく」
施策：「全国に先駆けてこの処理を機械化することに努めてきました」
政策目標：「町を汚したこんな風景もなくなる」

さらにこのニュースには、下線①に示す、もう一つの否定語が含まれている。

対象:「手押し車のような」
否定:「非科学的なもの」

これは政策課題そのものを表現するものではなく、「処理を機械化する」という施策の説明に関するものだと解釈できるだろう(図5)。

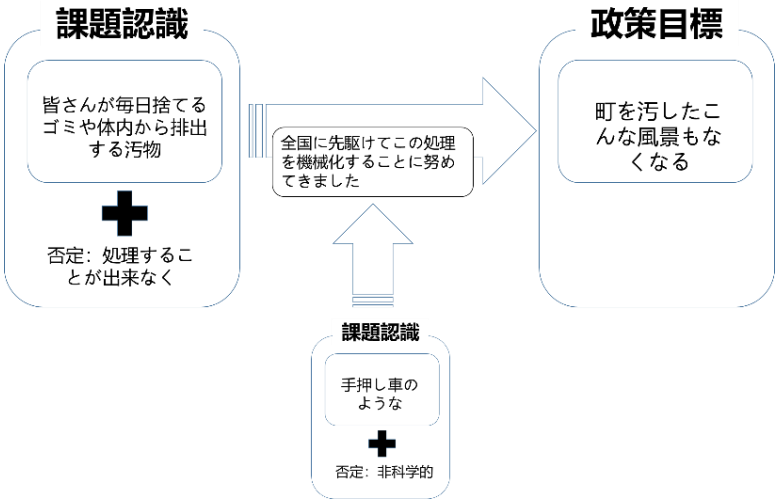


図5 「皆さんのあと始末」(昭和 31 年 5 月 16 日)の否定表現

2．2．2．否定的な評価表現

これらの明示的な否定表現の他に、ニュース映画には、否定的ニュアンスを含んだ評価表現が多く含まれている。

例えば、昭和 28(1953)年 10 月 21 日付け「伸びる市民の足」では、以下のようなナレーションがある。

「人口が増えるに従って頭を悩ますのは、まず交通の問題です。
特に工場街をバックに持つ川崎市は、朝夕の通勤ラッシュをさばく交通機関は一苦労です。」

ここでの、「頭を悩ます」「一苦労です」は、文法的には否定表現ではないが、それぞれ「交通の問題」、「交通機関」に対して、否定的なニュアンスで表現をしているものと考えることが出来る。

そこで本研究では、「日本語アプレイザル評価表現辞書」[佐野2011]に基づいて、「否定」に分類されている表現を含めて考察した。さらに、特に社会的な観点から、そこに含まれていない語に関しても、拡張して考察した。

例えば、昭和 28(1953)年 4 月 10 日付け「利用される衛生試験所」では、以下のようなナレーションが含まれている。

「川崎市では保健所とともに衛生試験所を設けて、明るい健康な社会を作ろうと、毎日努力を続けていますが、赤痢、チフスなどの急性伝染病、および、寄生虫、梅毒、結核①などを未然に②防ぐため、あらゆる病原体③と取り組んで、その発生原因の探求、処置に活躍し、みなさんを恐ろしい病魔④から守っております。」

政策ニュース映画では、傾向として、映像のコマ割りが細かく、それに対する説明としてナレーションが機能しているため、一つの文が長いものが多いが、これもその例である。

このナレーションにおける直接的な政策の表現は、「*衛生試験所を設け*」ることであり、それによって目指す政策目標は、「*明るい健康な社会を作*」ることだと考えられる。対象は、川崎市を含んだ「社会」と考えられるが、図6のように、そこでは現状が表現されていない。そのため、その後の文で、それらの詳細化が行われている。

ここでは複数の否定の表現が含まれており、ナレーション中には、下線で示したように4つ含まれている。

否定表現①:「急性伝染病」、「寄生虫」、「梅毒」、「結核」
否定表現②:「未然」
否定表現③:「病原体」
否定表現④:「恐ろしい」「病魔」

「急性伝染病」、「寄生虫」、「梅毒」、「結核」など下線①、さらに「病原体」「病魔」など下線③④は、辞書中にある「病」、「病気」を詳細化したものとして、否定表現と考えることができる。また下線②「未然」は語彙的否定である。「恐ろしい」下線④は、同辞書では否定のものとされている形態素である。

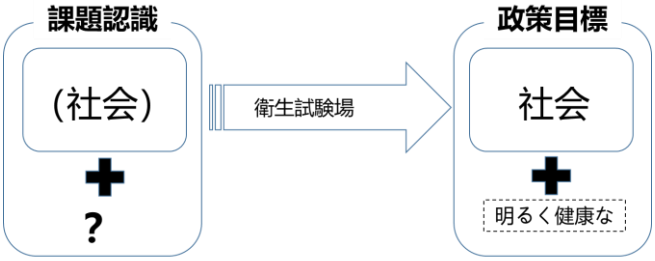


図6 「利用される衛生試験所」(昭和 28 年 4 月 10 日付け)の構造

下線①③④のような否定表現に含まれる名詞の場合、その語自体が、政策の対象とするものとその望ましくない状態を意味することが多い。ここでは「急性伝染病」などの存在する社会が望ましくない状態であり、「未然に防ぐ」状態が政策目標として表明されていると解釈できる。そして、「あらゆる病原体と取り組んで、その発生原因の探求、処置に活躍し」がそのための施策であり、それは「衛生試験場」の詳細な説明である。さらに、「恐ろしい病魔」が、望ましくない状態であり、「守っている」ことが政策目標となるが、これは、「衛生試験所を設け」る施策と、「明るい健康な社会を作」る政策目標の、詳細説明でもある。否定表現を中心とした、このニュース映画のナレーションの構造を図7に示す。

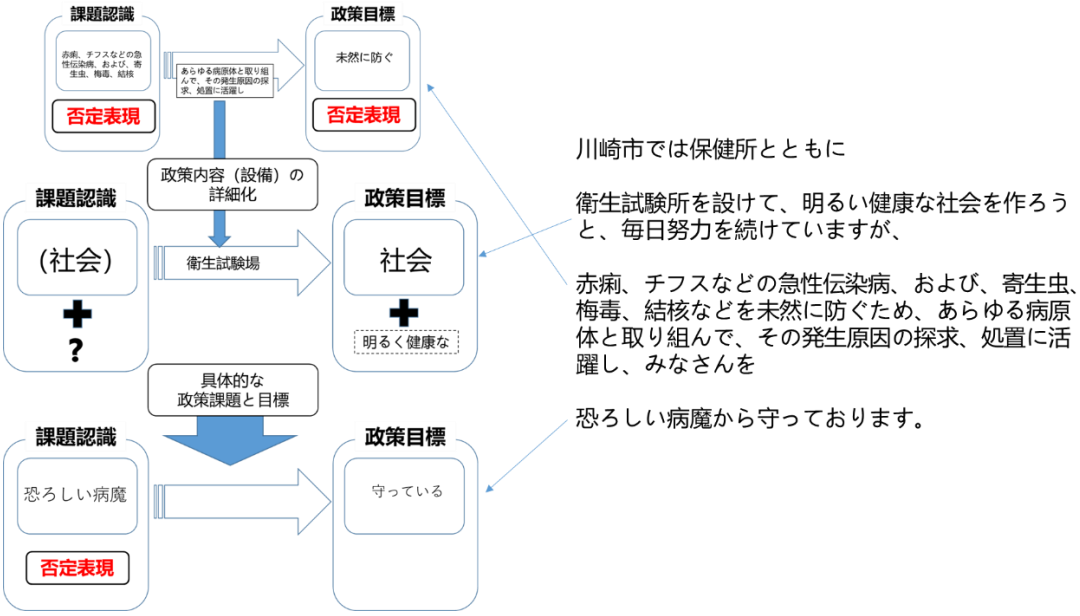


図7 「利用される衛生試験所」(昭和 28 年 4 月 10 日付け)の構造

2．2．3．逆接接続詞による問題提起

ここまで述べたように、否定表現に着目することで、図 1 で示すように、望ましくない状態と望ましい状態の差異を、社会課題として明確化することができると考えている。その目的から言えば、厳密には否定表現の範疇には含まれないとは思われるが、逆接の接続詞も同じような機能を持った語として捉えることが出来るであろう。

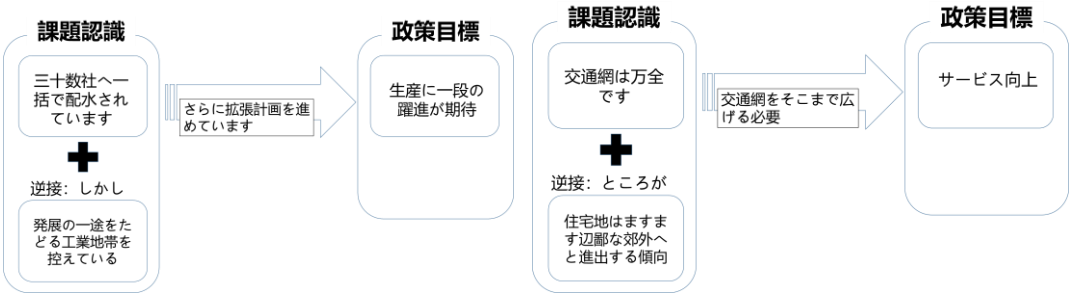
ここでは、接続詞「しかし」と「ところが」を例として示す。

昭和 33(1958)年 2 月 19 日付け「利用たかまる工業用水」のナレーションの一部は以下のようになっている。

「工都川崎市にとって、工業用水の供給は市の重要な仕事の一つになっています。…これらの水はすべて平間水源地へ集められ、ここから三十数社へ一括で配水されています。

<u>しかし</u>、発展の一途をたどる工業地帯を控えている市としては、さらに拡張計画を進めていますが、その実現の暁には、生産に一段の躍進が期待されています。」

この場合、「一括で配水されています」という状態に対して、逆接の接続詞を付加することで、その状態自体が不十分な状況であり、以下の文「発展の一途をたどる工業地帯を控えている」と接続することで、現状の課題が示されていると考えることができる。そして、以下の「さらに拡張計画を進めています」という施策が示されていると解釈することができるだろう。(図 8･1)



（1）　　（2）

図8　逆接による否定表現

また、前述した昭和 28（1953）年 10 月 21 日付け「伸びる市民の足」では、以下のように、接続詞「ところが」が使われている。

「東日本のトップを切って誕生した市自慢のトロリーバスがメインストリートから工場街へと走り、また市電も駅前から工場地帯を抜けて港へと走っており、縦横に広がるバス路線とともに、交通網は万全です。

***ところが**住宅地はますます辺鄙な郊外へと進出する傾向にあり、そうなれば、当然交通網をそこまで広げる必要が出てきます。そこで、このほど、市交通局は、バス路線の蔵敷線を柿生まで延長、また井田線を新城まで延長し、このほか、馬編線を創設するなど、市民の足として、おおいにそのサービス向上を目指すことになりました。」*

この場合、接続詞の前の「交通網は万全です」という状態に対して、逆接が行われ、「住宅地はますます辺鄙な郊外へと進出する傾向」という状況が示されている。これによって、「交通網は万全です」という状態が否定されていると解釈できるだろう。（図 8・2）

２．２．否定表現の抽出

ここまで見てきたように、明示的な否定表現が、ナレーション表現の中では最も中心となる問題の構造が一番わかりやすいため、以下に、構文的否定、および語彙的否定を昭和20年代から30年代まで抽出し、否定表現とその対象、さらにそれらに対する施策と政策目標を整理する。

ここで示すように、明示的に否定語を用いて行政課題を取り上げているものは、予想以上に少なかった印象である。詳細なデータは省略するが、政策ニュース映画におけるそういった傾向は、昭和 40 年代以降も継続していく。以降に、その傾向に関して、若干の考察を行う。

年度	表題	否定表現	対象	施策	目標
1952/6/19	手のかかる下水	おろそかにできません	下水道事業	市では４か所のポンプ場を設けて排水に努めていましたが、最近、京町ポンプ場が新たに完成	威力を加えました
1953/9/16	老人の楽園	身寄りのない	老人	収容しています	老人の楽園とも言うべき設備を誇っています。
1953/12/16	買い物は正しい目方で	大変不愉快な	買い物をして目方が少ない	自由計量所を設けました	買い物の目方をすぐその場で確かめられる
1954/2/24	聾学校の子供達	耳が聞こえない 不幸な	子供たち	教育する	楽しく勉強に励んでいます
1955/4/20	保育園の一日	十分に面倒を見られぬ 悪い干渉によってその影響が心配される	子供	預かる保育園が、市内の２４か所に設けられています	有意義に一日を過ごします。
1956/2/15	建設の陰に働く人々	あまり評判がよくない	これらの人たちのあり方	下水の土木工事に使うU字型側溝の自家製造を始めました	不評を何とか挽回しよう
1956/6/20	煤煙の科学調査	メガネなしでは監視もできません	監視員	科学的調査に乗り出し	煤煙対策が問題になっている今日、その成果は大きく注目されています
1956/8/15	お母さん達のお勉強　育児学級	不十分	健康診断	育児学級が開設	かわいいお子さんたちの上手な育て方を学ぶ
1958/8/26	工業青年の学級	与えられていない	教育の場	工業青年学級を開設	働く青少年として少しでも教育を身につけ、働く立派な産業人となるように
1958/11/25	近代化する清掃作業	海に捨てることもなくなり	汚物	近代的な清掃所を完成	衛生面に大きな貢献
1959/5/26	身体障害者に明るい話題	就職できない	気の毒な人たち	身体障害者更生補導所を開設	生徒たちは希望に満ちた楽しい毎日を送っています
1957/10/16	拡張すすむ川崎港	出入口がなく	川崎港	防波堤を新しく作り、港の入口を設けることになった	数年後における川崎港は、わが国第一の工業港となることが約束
		不便を与えていました	船舶		
1959/10/27	赤い羽根いろいろ	親のない	子供たち	一緒に遊びました	

表１　明示的な否定表現の例

３．まとめと考察

政策ニュース映画は、川崎のみならず他の地域のものも、全て行政側の観点から、地域課題を明らかにし、それらに対する施策を報告する内容を持ったものが多くある。しかしその多くは、行政施策の実施を取り上げることで、その背景にある社会課題そのものを匂わせるという表現を取っていることが傾向として見られた。

実際に上記例で言えば、道路や物理的施設、設備の整備などは、事前、事後という形式での映像があるが、否定表現がなされるものに関しては映像化がし難いものが多いようである。その他に、前述の川崎市政時報には、かなり頻繁に取り上げられていた、昭和 20 年代の大きな社会課題であった、ヒロポンと野犬に関しては、殆ど映像化されていないことから考えると、当時の主要な娯楽であった映画として、それらの映像を取り上げることに、なんらかの制約や躊躇があったものと推定される。

こうした傾向は、昭和 40 年代以降、川崎市において非常に大きな社会課題であった、工場のばい煙による大気汚染と公害病の報道においても、同様のものが見られる。本研究では考察の対象としていないが、川崎市では、昭和 30 年代に産業の中心が石炭エネルギーから石油産業に転換するとともに、公害が発生し、住民の健康被害が深刻になって行った。

昭和 30 年代後半から 40 年代にかけて、住民運動が起こり、また行政側としても公害条例を制定するなどの公害対策を行った。それほど、川崎市の環境汚染は深刻であり、以降の川崎のイメージを規定するほどの大きなニュースだったはずではあるが、実を言えば、川崎市政ニュース映画における、公害やスモッグなどの扱いにおいても、比較的直接性が薄い表現がなされている。

川崎市政ニュース映画で、直接公害が取り上げられるのは、昭和 31（1956）年 06 月 20 日付け「煤煙の科学調査」が最初である。ここではかなりショッキングな映像が映り、問題提起としては明示的になされている。

図 9 「煤煙の科学調査」（昭和 31 年 06 月 20 日付け）画面キャプチャ

ナレーションでは、「*林のように立ち並ぶ煙突。どんよりと空を覆う煤煙の量は、1日60トンにも及ぶと言われます。工業街の近くにある火の見やぐらのガラスは、泥水をかけたように汚れ、監視員はメガネなしでは監視もできません。*」と事実の列挙が中心で、否定表現は「*メガネなしでは監視もできません。*」と、公害そのものではなく、間接的に使われている。

以降、何回か公害やスモッグは取り上げられるが、代表的なものを以下に列挙する。

1971/6/22「空気がおいしいな」
1972/1/25「公害防止施策を進める」
1972/6/27「きれいな空気のなかで　グリーンスクール開校」
1972/9/26「公害監視を強化」
1978/3/15「川崎・横浜公害保健センター完成」

ここで示すように、公害のニュースに関しては、単なる問題提起ではなく、行政の施策の報告そのものがテーマとなっている。特に「空気がおいしいな」と「きれいな空気のなかで　グリーンスクール開校」は、郊外から疎開する子供たちの姿を通して、公害という課題を間接的に表現するという形式をとっている。政策ニュース映画は、行政側が認識をしている行政課題を記述したものという側面はあるが、映画という娯楽手段でもあるという点が、表現に影響を与えているとも言えるだろう。

政策ニュース映画の理解において、ナレーションの語彙分析は有効な手段ではあるが、ニュー

ス映画の特性に基づいた分析の枠組みが必要である。そのための一つの手法として、否定表現に着目することは、有効であることは明らかになったと考えている。

謝　辞

本研究は、本研究は JSPS 科研費 JP12345678 及び、19K12724 の助成を受けたものです。

文　献

春木 良且・田中 弥生・田村 寛之(2017)「川崎市市政ニュース映画のナレーション分析を用いた映像理解の試み ： 市民アーカイブズ構築のための枠組みとして」,言語資源活用ワークシップ発表論文集　2，pp.239 – 251.

春木良且・田中弥生(2018), 「よい子って誰？–政策ニュース映画のナレーション表現に関する研究の一環として–」, 言語資源活用ワークショップ 2018 予稿集

神奈川ニュース映画協会（1953），神奈川ニュース製作内容

佐野大樹 (2011) 「日本語アプレイザル評価表現辞書—態度評価編— JAppraisal 辞書 ver1.0」, 言語資源協会発行

関連 URL

川崎市映像アーカイブ　https://www.kawasaki-movie-archive.com/

政策ニュース映画研究　https://www.facebook.com/municipalnews/